

Geoffrey Walford, 2007, "Everyone Generalizes, but Ethnographers Need to Resist Doing so" In Walford,G(eds), *Methodological Development in Ethnography, Studies in Educational Ethnography Volume12* ,pp.155-167.

(ジェフリー・ウォルフォード、「誰もが一般化するが、エスノグラファーはそれに抵抗する必要がある」ウォルフォード編、『エスノグラフィーにおける方法論的展開』.)

はじめに (pp.155-158)

- ・ 1977年にポール・ウィリスによって書かれた『ハマータウンの野郎ども (原題: *Learning to Labour*)』について
  - 著者が出席した2006年に開催されたエスノグラフィーと教育に関する2つの国際会議において、この著書は数多く引用されていた。
  - ウィリスの著書は半世紀の間に最も影響力のある教育についてのエスノグラフィーであり、現在においても広く引用されている。
  - 他方で、上記の「成功」は、著者と読者の双方による過度の一般化に関係している。
  - さらに、後述するが一部の不適合の少年の経験を過度に一般化したことが、労働者階級の少年の大部分が労働者階級の仕事に就いた理由についての理解の欠如もしくは問題化につながっている。
- ・ 著者の関心は、ウィリスの著書の副題（「労働者階級の子どもたちがどのようにして労働者階級の仕事に就くのか」）に向けられている。
  - ウィリスの著書は現在においても、労働者階級の若者（せいぜい少年に限られていて、その歴史上の特定の時期に限られる）が最終的に手に入れた職場の仕事の文化とさまざまな形で共鳴する文化を創造的に作り上げたことを正確に示しているものとして読まれている（が、それは過度な一般化である）。
- ・ ここでウィリスの翌年に出された別の著書（1978, "*Profane Culture*"）も取り上げたい。
  - これはウィリスの博士論文が元になっており、「バイク少年 (motor-bike boys)」と「ヒッピー (the hippies)」という2つの異なる若者のグループについてのエスノグラフィーが含まれている。
  - それぞれの調査は、次のように少人数を対象に行われた。
    - ・ 最初のグループは、匿名 (un-named) のイギリスの大都市にある教会につながっている匿名のバイククラブとの接触を通じて見つけた。9ヶ月にわたって1人を中心に、5人のコアメンバーを持ち、別の2人が頻繁に出席する、ゆるいいくつかのグループにフィールドワークとインタビューを行った。
    - ・ 2つ目のグループは、匿名の大きな工業都市にある公営住宅を訪問してコンタクトを取った。調査の中では、3人の若者からなる3つの異なる小グループと過ごし、そ

れぞれの家で彼らにインタビューした。

- しかし、この本は正当性を担保できる以上の主張をしている。”*Profane Culture*”のイントロは次のように書かれている。

この本は、1960年代に生まれ、現在でも大きな影響力を持つ二つの重要な文化を紹介している。

それらは、バイク少年とヒッピーである。本書の形式は、これらの文化の内部的な意味、スタイル、および動向についての2つの民族誌的な説明であるが、本書の本質的なテーマは、抑圧された、従属的な、または少数派のグループが、彼ら自身の活気ある文化の構築に関与することができ、単なる愚か者ではないということである。

- ここでは2つの限られた事例から、サブカルチャー全体についての主張がなされている。そして、このように少数の事例から全体の文化に関する主張を行うというパターンは12人の少年たちを調査対象とした『ハマータウンの野郎ども』でもなされている。
- ・ ウィリスの研究で得られたデータの質と量、あるいは調査者と対象者の関係性の深さは疑う余地はないが、問題はデータの分析と導出された結論にある。それは、ある特定の学校で作為的に選ばれた小さなサンプルからの不適切な一般化という問題である。
- ・ もちろん、私たちは皆、一般化する。毎日を生き抜くためには、それが必要である。例えば、本章の最初に著者は2つの国際会議に出席したエピソードを挙げているが、これらのカンファレンスがどこで開催されたのか、実際にいくつのセッションに参加したのかについては何も述べていない（しかしそれでもこのエピソードは理解可能となってしまう）。私たちは日常生活の中で一般化するためにエピソードを用いるが、エスノグラファーはもっと注意深くある必要がある。エスノグラファーはむしろこの一般化に抵抗するために工夫を凝らすべきなのである。

### 一般化のジレンマ (pp.158-160)

- ・ ウィリスの事例は、エスノグラフィーにおける根本的で長年のジレンマを表している。それは、少数の現場に焦点を当てる必要があるという一方で、単一の事例だけでなく、より広い広範な適用可能性を持つ結論を導きたいというジレンマである。
- 教育に関するエスノグラフィーの中には、学校または学校内の特定のグループの子どもや教師を「典型的 (typical)」な例と見なしたり、他の学校にも適用できる「洞察 (insights)」を提供できるといった理由で研究されている例が多くある。
- しかし、厳密に言えばそのような研究は、学術論文や本が出版される何年も前に、ある特定の学校での出来事が、その特定の教師や生徒との間で起こったことを示すことしかできないはずである。

- ・このジレンマへの対応策として次の2つが標準的なものとして挙げられる。
  - ①「分厚い記述」によって「転移可能性 (transferability)」を担保すること。
    - もし著者が研究された特定の文脈の完全で詳細な記述をすれば、読者は自分自身または他の状況への発見の適用性可能性 (applicability) について十分な情報を得た上で決定を下すことができると主張される。
    - ↔ しかし、ある学校での民族誌学的研究から得られた特定の知見が他の学校にも当てはまるかどうかを判断するためには、実際には第一の学校と同じくらい第二の学校についても知る必要があり、どこかの推論過程で無根拠な前提を置く必要性が生じる。
  - ②理論的な一般化への貢献を図ること
    - 多くの著者は、ケーススタディから経験的もしくは統計的な一般化を図ることを避ける。そして、特定のエスノグラフィーから得られた知見の意義は、事例ごとの論理的な論証の強度 (strength of logical argument) <sup>1</sup>から導き出せると提案している。そして、特定のケースとより広い集団の論理的結びつきが強い場合、理論の外挿が可能になるとしている。
    - ↔ 説得的な理論的な議論のためには、より広い母集団を対象とした多くの実証的作業が必要になるため、この経験的一般化を避ける試みは失敗に終わっている。

### いくつかの個人的な例 (pp. 160-162)

- ・著者自身もエスノグラフィーの一般化可能性の考察には悩まされてきた。
  - 後悔があるものは、『パブリックスクールの生活 (Life in Public School)』についての研究である。それは、2校の事例から限られた範囲 (具体的には他の29校) にも知見が一般化できると主張したが、2校に知見の適用範囲を限定するべきであった。
  - 他方で、バーミンガムのアストン大学を対象とした、政府による極端な資金削減の影響に関する研究では、特定の大学内の反応を研究したものであり、一般化に問題はなかった。なぜなら極端な資金削減の影響に関心が向いていたからであり、他の大学で起こりうることの予測を志向したものではなかったからである。
  - その他にも、キングスハーストのシティ・テクノロジー・カレッジについての研究や、小規模の福音派キリスト教私立学校と政府の関係についてのエスノグラフィックな調査を行ってきたが、いずれにおいても一般化の誘惑はなかった。なぜなら、著者の研究のほとんどが、名前のついた学校を扱っていたからである。それらの研究は、特定の学校それ自体への興味を持って行われたものであって、一般化を期待して行われていなかったのである。

---

<sup>1</sup> 著者はこの「強さ (Strength)」についての公準は触れていない。

### 名前を付けることの重要性 (pp. 162-164)

- ・ 著者は以前より、様々な組織における倫理審査委員会が作成した倫理ガイドラインにおいて、エスノグラフィーのデフォルトな立場が、調査地に名前をつけないことであると仮定しているのは間違いであることを指摘してきた。
  - 倫理的な理由は様々であるが、ここでは調査地が匿名であることが著者や読者にどのような影響を与えるかという現実的な問題を検討する。
- ・ エスノグラフィーにおいて匿名性を担保することの主な理由は、調査地に及ぶ被害を減らすという倫理的な配慮によるものである。しかし、それ自体がどの程度合理的な理由かは疑問が残る。
  - むしろ、匿名性という考え方は、研究者が絶対的な正確性をあまり気にせず本や論文を書くことを可能にし、弱い根拠に基づいて議論を行うことを可能にしているのではないだろうか。
  - さらに匿名を保つということは、研究の結果に偽りの一般化可能性を与えてしまう。エスノグラファーは暗黙のうちに、自身の知見が他の状況においても適用可能であるように、読者に示しているのである。
  - また、具体的な詳細の欠如は、読者を一般的な理解へと常に誘惑する。冒頭のウィリスの例もその一つであろう。
- ・ 研究に関する場所が特定されていないという事実は、著者と読者に、調査された状況を超えて各研究の調査結果を広げる機会を暗黙のうちに与える。それは特定の研究の結果に時間と空間の誤った一般化可能性を与える。調査地の実際の名前を挙げることは、読者が一般化しないことを保証するものではないが、突飛な一般化の例を減らすような働きをするかもしれない、間違いなく研究発表者の執筆をより慎重なものにする。

### 結論 (pp. 164-165)

- ・ ここまで述べてきた一般化可能性の欠如を弱点と見なすべきではない。事例研究は、読者が通常アクセスすることができない状況を追体験させてくれる。
  - だからこそ、エスノグラフィーのフィールドは、そこでの活動それ自体が興味深いものであったり、それ自体が重要であるものを対象とすべきである。
- ・ 冒頭のウィリスの例は、過度に一般化された主張をしたことにより、教育のエスノグラフィーの発展を阻害してきた部分がある。ウィリスの知見をむやみに適用することで見落としてしまう問いがある。
  - 最後に示した名前を示すということは本章で述べてきた偽りの一般化の可能性を減らすことにつながるだろう。